

『海陸妖敲込』(大東急記念文庫蔵本)の書誌と翻刻

有 働 裕
古久根 圭
中 村 雅 未

本稿は、大東急記念文庫所蔵の『海陸妖敲込』についての書誌的記録を述べ、写真版と翻字とを示すものである。なお、写真版はマイクロフィルム(江戸時代文学總瞰 二六黒本・青本(二))のものを使用した。掲載をご許可いただいた大東急記念文庫の皆様に深謝申し上げる。

一、書誌的記録

本書は、『補訂版 国書総目録』に、

海陸妖敲込 かいりくばけ ものはりこみ 二卷二冊 (類)黒本 (著)鳥居清満

画 (成)明和元年 (版)大東急

と記されている。また、川瀬一馬『江戸時代文学書概論 増訂版』(雄松堂書店・昭和五二年)には、

海陸妖敲込 ばけものはりこみ 二卷 明和元刊(鱗形屋孫兵衛)

と記されている。『大東急記念文庫書目』には、

〔海陸〕妖敲込 ばけものはりこみ 二卷 明和元刊(鱗形屋孫兵衛)

二(冊) 四四(函) 二〇(架) 三八九一

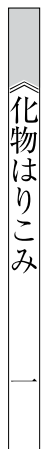
とある。

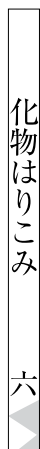
以下、本書の体裁を示す。

(1)表紙 後のもの。無地。濃紺。ただし上巻の方がやや明る

い色合いになっている。

(2)題簽 後のもの。書き題簽で「海陸化物はりこみ上(下)」。

(3)板心  一 《化物はりこみ》 く五

 六 化物はりこみ く十

(4)寸法 表紙上 一七・三cm×一二・七cm

表紙下 一七・三cm×一二・八cm

題簽 一一・七cm×二・八cm

- (5) 紙数 各五丁、計十丁。
- (6) 画作者 記載なし。
- (7) 刊行 広告から明和元年と推定される。
- (8) 広告 十丁裏に鱗形屋孫兵衛の「申正月新版目録」がある。
- (9) 彩色 四丁表、五丁表、六丁裏、七丁表に朱色の彩色が施されている。

二、写真版と翻字

翻字に当たっては、文字の配置を原本に出来るだけ忠実に
なるよう努めたが、紙面の都合上そのようになっていない部
分もあるので、ご容赦願いたい。

なお、手摺れなどによる判読不明箇所は、○で示した。

上巻表紙

(二丁表)
あいつはやくたつ
まいをれが
あとそうぞくが
ゑせまいさ

こしのげいをおやのかはりにみ
てもねつからこわからぬはと
うした御事だやら
あるよみこし入道なかまの内よりようし
をせしがひんはよけれともきはめてかきやう
にうとしこれによつてようふ入道山影
よりうしろ
かれにみこ
させてあ
ばいを
折ふし
くらげくが
にようあ
つて此所を
通るかゝる
ば両がん
み
小入道しんだいぎりくびをのば
なくこしけれともくらげなれ
なくこはがらすしてゆく

(二丁裏二丁表)

おまへさまの

おかげです

かたんの

てきちう

やつがれはりや

うちがさほ

どにごさらぬ

がわれらがたけり

のき、道今での大

ばやり一りう

金たんでみそあげ

ますゑへんく

くがのばけもの共

ごくしよを

しのがんと

とて四まの

やかたぶねに

のりかけねこ

は八ッちのねじめよく

むまはたい

こうちにはとり

はやこえを

つげのこわ

いろつかいき

つねはゑて物の

八人けいにを、

みせず

中にも

はいろけ

なつばのき

ながやのお

ちんといふ

げいしやめり

やすがゝりにけうをあら

せ川一ばんのおちをとりけり

おらんだ

りうの

ぢやう

ぢをう

ゆるわ

水の中

郎の川

をいほ

なやみ

いろく

りやう

すれども

げんも

おつと

あんと

げくわ

ごくし

にたの

のけと

ふらに

にあふ

のあふ

ひたと

むると

ときは

のよし

どちつ

くうけ

とつた

やその

はくれ

日みは

のこす

しうち

どうぞ

のよい

とや

〇〇

んや

のたま

池田

やをの

みませ

ふ

(二丁裏三丁表)

舟ゆ
さんの一き
やくひゝのさる

介うわ
のばみ
平ろ

あ

をさきのび
蔵ほんのふなまぐろになりすゞりふ
た物むしざ
あんかけ
わらの

はて

よめん

おれが
しりへ
はさむ

なすが
みへぬ

も
あつぶて
きなり
わつさり
とし

すいひんのうへは思ひ
物ではのめぬてん
とそのあちわい
小田原やのもり
くちときています

か
なほしやとくが
に
あがりあたりをみればまつの
木のゑたにさみことにひかりて三
年なすびのかうのもの二ツ三ツほしてありこれこそ
かゝる所へ川太郎来り木に
ほしておきたるなす
びをさがせとも一ツ
なしはて
めんよふな
とうろたへ
まはる舟ゆ
さんのはけ
物なにをたづ
ぬるといふ時
くたんのわけ
をさんく
ふみのめす

さきくふ

あたま
の水
がいつ
てき

うぬはむさ
いものを
ほしてをいて
よくをらにむねを
わるくさせたなこい
つ
おち
ころ
が

あゝゆるし
給へく

せとう
だん

(三丁裏四丁表)

くらけいさゝかのなしみなれと小入道へ
なごりをおしみらくるいせしとぞきどくなる

あゝ御な
ごり
おし
や
なあ

なむあみ
く

みこしの小入道
とかくおやのき
にいらぬゆへさ
てはわれいま
だばけのしゆ
ぎやうのたらぬ
とさとりさらぬ
ばしよこくへわ
たりくにくへ
のばけのせん
をたんれんせん
とくはいこく
する

うつものもうたるゝ
ちはもとのつちくれさらばく
の

くまのゐん
こくくわん
しでいか
ねばよい
くすりがい
ござるた
のねつみ
がきめう
じゃ

なんちのりぎよが一人のむすめを人きよ
ひめといふかんしやくはなはだしく年を
へてくるしむ山だつは水へんにこらうへし
物ゆへさかしきおのこなればそうだん
するにこれはでんそとてたの
ねつみをしよくすればやまい
なおるとおしゆる
みつからが此つかへははやく
とのごさへもてば
ついでさかりま
すいつ

まで
ひとりね
する事
じややら

(四丁裏五丁表) 舟ゆさんの折からかうもり川太郎がすまいの
へんのうつくしきはちやがきを
みておき何とぞこのかきをしてこまさんとおもへどすぎしころ
川太郎をいじめける ゆへなにとか心おくれしがもとよりいち
のいや しき男にて あるよしのびかきの木に のほり
みを ちゝめてぞ ひそ まり ける
せんどは

よくおれを
いちめた
ひつかへしに
うぬめてん
じやうみせる

つもり ていた
こいつには
さんせうみそを
なすりましよ
したゝか
ふちのめ
しましよ うぬめく

それは
あまりどうよくな
だまりやがれふさくしい
それそいつが目玉へ
ことうからしをふり
かけましよ

さめと
なまづはぬらつきのと もだちいざやこよい
川太郎方へしかけ しんそば をねたらんと来りしが
みればあやしきかきの木の上にし のぶものあり
かすさめさそくをきかしき ほにもちを
つけてさしとりみれば かうもり也
したゝかかきを くらひて
いたる此 さわきに

川太郎来り
せん日のしかやしせんと
かうもりをしたゝかぶち
のめし はねをきつ
ておい はなす

(五丁裏)
 小入道丑三つ川の田のへんにやすみけるにいけのどんかめ来り
 田のくろをほりかへしね つみをとらへたり入
 道それはなにゝし給ふ といふかめが
 いわくてんそかへつ てうつらと
 なり 女人 かんしやくの
 薬 とつかうと
 いふ さてはたいらんしつけ
 とて これもばけ ものゝ内也
 すゝ
 め かい

ちうに入てはまくりとなり
 山のいもうなきとかはり
 しなゝさまゝ
 はけのたんれんを
 くふりする

おやかた
 事も万
 事にす
 いたこと
 はたねづ
 だ此ねづ
 みではね
 をとるつ
 もりが

下巻表紙

(六丁表)

をれも
はや七とて所で
口をきくたて
しだ此のこいは
をれ
が
の
みこんだ
よいわか
しゆさんじや
おまへさん
ならわ
しや
わいなふねじや

人魚ひめねつみをもらい少こゝろ
もちよしひやうきんのと
びうをいざや御きはら
しに
御出候へ
とて木の
みかはら
へともふ
こゝに又ばけ
のおやかたあなの
もとのかつ次いろ
よきわしゆのか
ほめかれずも
ながめてあいは
れとなるとび
介がやきもちを
よたか
のはや
七はり
たをし
両方とり
もつ

(六丁裏七丁表) きつね ひめをさらひ松の木に上る 所へひ

中より おい／＼ むめのかへりのおそきをあんじ水
の入道つゞ いて こずへに来る一ばんにかけつけたこ

かへさんとする
なんと
みた
一ばん
こゝ

所はりう
ぐうの
むじ
な大木
をゆす
りひめを
わたせ
ろし
もう
大わに

まとい
と
いふ
てい
さな
から
はな
だし
と
みへける

いよふ
がや
きて
と
いふ
てい
さな
から
はな
だし
と
みへける

なまづつゝいて来るを
ふくらうひやうたんにて
とゞめるを又ひき藏来りとくき
をふきかくるこれより水中のばけ
物くかのばけ物大たてひき
のはじまり／＼
なまつめまで／＼をれがひやう
たんでかくのことくとめた
所はやまとやの

はりこて

してたば

こ入のひきかへ

印とはち

かうそと

くきを

ふきかけてやらう

なんとふさ／＼し

かろうかや

平久といふみて
あらふがやなんと
／＼

(七丁裏八丁表)
こちとらかなり
は太夫さしき

としかたあり
きてゐるうぬ
うぬをか
ざまはおち
まの
けん
ふつて
ひんか
わるい
ふさ
く
らしいやつ
らしいやつ

い
いやあて事
ない

あれ
あんな
むねの
るいみ
ばかり
あげます
かたつ
はし
から
ほつ
ひつこ
ぬいたが
まし

山の上よりく
がのひくみ
おもひくみ
はりこみふ
うぬめらか
やんのなか
けいとういれ
たかつても
やわやては
すまぬ
てんじやう
みせるそよ
此のことくさ
わくははた
くはてはか
いつそふち
あいつらな
つりのゑん
みてとうや
なふてくし
たらしめら
たはなつ

まてくことのおこ
りも人魚ひ
め也にやり
ばあににい
はあまいこ
けふのねに
みなくかへ
されいたぶ
こがいゝぶ
水中よりて
づけのはり
あつちはは
こつちは大
でけく入

(八丁裏九丁表)

みればさもすさまじきあを

やいこ
そうこはいか
／＼あゝうしくらま山
そうじやうといふみ
であらうがや

でんのはく
かんではゑ嶋き
せき近松もん
さへもんと
きてい
ますしかし
さんがいきやう
わかん
さん
さい
とくとさいけん
給ふか

そうたいばけ物のはなしをきくにみ
こし入道にみこされるときはから
だがおもくなるといふなり
小入道ある山中を通る時なにやら
どつさりとおいの上にとするを

さきくびをのばしたかく
こしけるありさま大あたり
をれをみこそうと
はちとふと印なやつ
びのつかいやうに
あけさげも
あるま
めとり
だ

それより小入道
わけもの、せんせい
わくるまのかたへゆきよ
もやまのはなしのうへ
はけ物そうしをつく
らんと
だんする

われらかくしよこあんぎや
いたしばけものかたのみ
こみましたおとぎ
ほうこと申五さつ物
つゝらふとすんし
そんし
ます
もろこしちやう金が
はくぶつしをとくと
のみこみやまさ

(九丁裏十丁表)

こちのしわんぼうが此さかな
代壺両三分のいたごとだおい
らもちと此かすりをとらねへ
ならぞうしのかたびら
ほしやのふ

大入道きつ次をと
りもちこんれいとゝのふ
りぎよのかたよりも
さんだつめう代
として

ひめを
とも
人魚

まち女郎 おとりこ
おちん酒の あいてに
出てあ やなす

これ
／＼おちんさんだつ
せんせいへの御ちそう
にわ つさりとろう神
そろ はめりやす
と

此 こんれいの
後 は きさまと

はれ
めから
ふくぞう

なしに申
たんじたら

ひつきうて
ごさうのに
それはあつてすぎた

事 ことくたがい
に御くすりをかけ

やいまし
てはまさ
きのかづら 大へい らくをうたいます

おらがだんながつねはしはむしよ入道
だが酒にはせにはおしまぬ ○ざけ
ほう 丁の池田やの ことよ

これれいはあすのばんのうしみつ
じやげなまち久しいことのわしが
をもはくさんにはよふあいたい

申正月 新／板 目録 絵師 鳥居清倍／鳥居清満
 元良／新王 倭哥甘露雪 五／冊 高野／那智 色盛鬼
 十七 三／冊 二巷業平橋 二／冊
 華／兄 実異青梅縞 三／冊 和田／合戦 朝比奈地獄破
 三／冊 日／本 蛭子大國記原 二／冊
 浮／世 七小町徒女 三／冊 真鶴／洲崎 佐殿開運源
 三／冊 金印／守護 夜道千人力 二／冊
 日本／范蠡 高德花王 三／冊 天竺／徳兵衛 渡海産
 二／冊 海／陸 妖敲込 二／冊
 双／丘 金賣橘次分別袋 三／冊 菊花千金猛 二／冊
 板元 鱗形屋／孫兵衛
 珍敷新板物御慰三追々出し懸御目申候

(うどう・ゆたか 本学教授)
 (こぐね・けい 本学大学院修士課程二年)
 (なかむら・まさみ 本学大学院修士課程二年)